

入選

ぼくの大切なおばあちゃん

栃木県 藤岡小学校 5年 須藤 星成

「もう、このまま死んじゃいたい。」

この言葉を聞いたとき、ぼくの心はずきずきと痛みました。

ぼくの家族は6人です。ぼくの祖母は、パン屋さんを営んでいました。お店には、地域のお客さんがよく買いにきてくれて、いつもにこにこした笑顔でパンを売っていました。ぼくも祖母が作るパンが大好きでした。

しかし、ある日突然、足が動かなくなってしまったのです。それは、30年間ずっと立ち仕事をしてきたからだというのです。そのとき祖母は、すごく気持ちが沈んでしまい、孫であるぼくに向かって、

「もう、このまま死んじゃいたい。」

と泣きそうな小さな声で言いました。目の前にいたぼくも、泣きそうになるのをこらえることが精一杯で、何も言えませんでした。

その夜、ぼくは布団にもぐり込み、その日のできごとを思い出して泣いてしまいました。あんなにパン屋さんが似合っていた祖母。大好きなお店がもうできないのは、相当ショックなことに違いない。そして、祖母は歩けるようになるのかと。ぼくは、しばらく布団の中でいろいろなことを思い、この考えにたどり着きました。

(ぼくにできることは、なんだろうか。)

それから祖母は、約4カ月入院しました。

今は退院して、以前よりはすごく元気になりました。けれども足はまだ少ししか動きません。そこで、ぼくが提案したのは、今まで祖母が一人でやっていたことを、家族で分担しようというものです。今は、それを実際に挑戦し続けているところです。

ぼくは、祖母をトイレに連れていきます。自分で歩きたいときは、転ばないように後ろから支えます。たまに料理も作って運ぶなど、祖母が自由に動けないぶん、ぼくが手足になり、進んで手伝うように心がけています。

いつもなにかしてあげたときには必ず、「ありがとう」と言ってもらえます。言われると、とてもうれしくて、ぼくもつい、「ありがとう」と言ってしまうんです。ありがとうは、お互いを幸せにする言葉だと実感する瞬間です。

ぼくは、一生けん命手伝うことは、祖母に対する小さな親切だと考えます。それは、祖母に限らず、学校の友達や先生、ときには見知らぬ相手にも言えることだと思います。祖母からもらった、「ありがとう」や「助かったよ」などの温かな言葉がそのことに気づかせてくれました。祖母が歩けるようになる日がくることを願い、これからも精一杯手伝います。

そして、もう二度と「死にたい」なんていう言葉は言わせません。